

浄土

1982-4

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受承認雑誌)第三二二
昭和五十七年三月二十五日印刷 昭和五十七年四月一日発
四月号
第四十八卷



御土玩具



法然さまのご生誕

大地は自然の息吹きに生づき、桜花の蕾が染めるころ、白き兩幡が椋の木にふりかかる奇端あらわれて、法然さまがお誕生あそばされた。新しき生命のお誕生は、父母はもとより、多くの人々に久しくまちこがれ、こよなく讃えられた。長承二年（一一三三）四月七日のことである。

あれから八五〇年の歳月が流れた。法然さまの誕生は、その時代を超えて末法五濁の今日に至るまで、お念仏による救済のみ光がとどめなくかけられた。

「わが大師釈尊は法然上人なり」といわれたゆえんは、世界の人々の平和と安楽のためにもとめられた釈尊の光明が、現代にあかあかと灯しつづけられたのは、法然さまの出現によってはじめて成就されたことである。

明るく、正しく、和やかに生きる道を示され、いつでも、どこでも光りにつつまれて生かされる喜びを味わうことのできるみ教をお説きになられた法然さまのご生誕を、心から寿ぐものである。

兩幡のあま降ります椋の木に

世々に朽ちせぬ法の師のあと

—蓮生法師—（宮林昭彦）

四月号



光厳巍巍として、威神きわまりなし。

——『無量寿経』 歎仏頌

目次

法話

花まつりと法然さまのお誕生……………山口 諱 存……(2)

概念の転換

——花まつりに寄せて——……………石 川 孝 之……(6)

勢至丸像こぼれ話

——あれから五十年はすぎた——……………高 橋 良 和……(10)

＜随想＞ ほとけとの出会い(十七)……………佐 竹 隆 三……(14)

翔 ぶ(二)……………木 下 隆 一……(19)

還相行の聖者 勢至丸の誕生……………賀 幡 亮 俊……(24)

俳句作法(三)……………河 野 喜 雄 ……(32)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(30)

＜新刊紹介＞ ハッシュネッカー著『幸福への意志』……………(29)

＜表紙裏・巻頭言＞ 法然さまのご生誕……………宮 林 昭 彦

念仏ひじり三国志⑤ ——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

話

法



花まつりと法然さまのお誕生

やま ぐち たい ぞん
山口 諦 存

(浄土宗開教振興協會事務局長
明石市光明寺住職)

四月の声を聞けばもう春本番、長い冬の暗さから解放された喜びの中に、八日の花まつりを迎えることは、仏教徒として一入大きな喜びでもあります。

釈迦牟尼如来をお釈迦さまと呼んでいます。元来はインドの釈迦族出身の聖者を意味しています。この聖者は前の世に数えきれない多くの功德を積み、その果報によつてたまたま、釈迦族のシュッドーダナ王とマールヤ妃との間に生を托されました。

マールヤ妃は静かに眠ったまま、六つの牙をもつ白象が、右脇より入胎する有様を夢みました。受胎を知った

シュッドーダナ王は、初めて恵まれた子の運勢を占師にたずねました。その答えは世界を統治する転輪聖王か、出家すれば仏陀となるであろうとの、予言でありました。

妃は臨月近く出産のために、国の習慣に従い、生家のデーヴァダハ城に帰るために、ルンビニーの花園に憩い、咲き誇る無憂華の美しさに見とれ、思わず右手をあげてその枝を手折ろうとする時、右脇から安らかに太子が誕生し、そのまま東南西北下上の六方に向つて七歩し、右手は天を左手は大地を指して「天上天下唯我独尊」と

称えられました。時に四月八日と伝えられています。

生れて六方に七歩せられたことは、六道輪廻の迷いの世界を超えた自覚と、世に類いなく尊い生命の享受者であるとの宣言であります。父王は居城カピラに一族を集めて、太子の誕生を祝い、一切の願いが成就するとういう意味の、シッダールタと命名しました。宮廷はもとより国をあげてこの喜びにひたりました。しかし、この喜びも束の間、マヤー妃は出産後七日にこの世を去り、太子は妃の妹によって養育されることとなりました。

仏母たりとも女人は悲し灌仏会

多佳子

母と薄縁でありました太子は、後にお釈迦さまとなられ、数多くの説法を残されましたが、特に法句経は時処縁に従って、極めて平易なユニークに説かれた有名な経であります、その中に、

世に母性あるはさいわいなり

父性あるもまた、さいわいなり

世に道を求むるものあるはさいわいなり

バラモンの性あるもまた、さいわいなり

(第二十三品、三三三)

と、人の幸福をあげられています、その初句に「世に母性あるはさいわいなり」と、母をもつことが第一の幸福であると説かれていますことは、わずかに七日間の生母とのえにしを悲しみ、ご生涯を通じて母を慕われた、人間釈迦の側面が、うかがえるように思えます。

太子は七歳より教師について、学習や武道に励み、その聡明さはしばしば人びとを驚かせました。又四年間は帝王学をも学び、将来の王としてあらゆる教養を身につけ、何の不自由もない優雅な生活を過されました。

太子は少年の頃から性格が、冥想的内省的であつたらしく、ある年の農耕祭に父王と共に出かけられた時、農夫に掘りかえされた土中から出てきた虫が、飛んできた鳥にしばまれているのを見て、生類はお互いに食べ合わねば生きてゆけないことを歎き、一人林に入って大樹の下に坐り深く想いをめぐらしました。十九歳、ヤソダラー姫と結婚しましたが、この新しい生活になじまず、人間の苦悩からのがれるためには、出家よりほかに道はないと決意し、ある日、林に遊び、暮れて城にもどらう

とした太子に、王子誕生が伝えられました。

太子は王子にラーフラと命名し、その夜喜びにわく城をぬけ出て、ひそかに愛馬カントカに跨って、再び帰らぬ旅に出ました。時に太子は二十九歳でありました。

「大いなる放棄」、地位、財産、権力などの総てを棄てて一介の出家となった太子は、王舎城にたどり着き、二人の仙人について修行しましたが、心を満すものではありません。失望した太子は王舎城を出て、尼連禪河のほとりにある前正覚山に登り、六年間の苦行生活に入り、断食と減食の苦行はもとより、あらゆる苦行は試みものの所詮、それは悟りへの道ではなく、無益の苦行にすぎないことを知り、新しい道を求められました。

まず、体力を回復するために、尼連禪河にその身を清め、衰弱し果てた身体を岸に運び、村の一少女から牛乳の供養をうけて、忽ち若い輝きをとirmとされました。

やがて太子はガヤに近い菩提樹の下に坐り、悟りを開くまでは再びこの座を立たないと決意して、冥想に入られました。魔王は多く悪魔を集めて、太子を次々と攻め立てて、屈服させようとした。しかし、太子は動せず、遂に魔王を下して、心のやすらぎを得、明らかな

知恵によって再び迷いのないお悟りを開き、悟れる人、覚者、仏陀となりました。時に三十五歳、暁の明星がきらめく十二月八日でありました。この聖なる場は金剛宝座として、今も尊いご遺跡となっています。この日を成道会と呼び、南無釈迦牟尼仏と称え、世界人類の光りとなりました。仏恩を讃えることになっています。

仏とされましたお釈迦さまは、そのみ教えを人びとに伝えて、人間の苦を救う、やむにやまれない布教伝道のために一所不住、インド各地に四十五年の長い旅を続け、遂に八十歳、身体が衰え果ててクシナガラ（沙羅樹）の並木にさしかかり、み足はもう一歩も進まなくなり、弟子や信者の看守の中に、最後のご説法は二月十五日の夜となり、灯の燃えつくすように、大いなる師は静かに涅槃に入られました。

沙羅樹の葉は一時に枯れ、鳥獸にいたるまでその死を痛みました。

就中阿難の歎き涅槃変

明浦

お釈迦さまのみ教えは、八万四千の法門といわれ、多

くの経文となっていますが、その伝来はインドより、有名なシルクロードを経て中国にもたらされ、更に朝鮮を経て日本に伝来し、奈良朝時代には仏教文化が花と咲き誇りました。しかし、それは仏教そのものではありません。苦悩にあえぐ人間の救済こそ、その教法であらねばなりません。

わたくしたちの宗祖法然上人は、末法の世には教も行も証もないけれども、ただひとつ残されているみ教えは、阿弥陀さまのご本願を信じて、なべての人びとが共に南無阿弥陀仏を称えて、救われるお念仏の仏道こそ、お釈迦さまのご本懐であると確信せられ、かねてより選びおかれしました。凡夫の救われる念仏の道は、お釈迦さまが人間の底辺を立場とされていますから、総ての人が救われるのであります。

このみ教えの発見者であり、日本仏教の改革者であります法然上人は、長承二年旧四月七日美作国（岡山県）の漆家にお生れになりました。奇しくもお釈迦さまご生誕の前日に当り、本年がお誕生八五〇年に相当しています。

上人は九歳、父上非業の死に会い、遺言を守って仏門

に志し、十五歳叡山に登って出家し、仏教の研學に没頭して知恵第一の名をあげられました。しかし知恵、学問によって悟りを得ることは、万人の仏道ではない。ここに若い日の法然上人が、求道研鑽の険わしい道をたどられた理由がありました。

名聞と利権の葛藤、俗習の学山を逃れて、十八歳黒谷の別所に入り、一切経を五度までも読破し、四十三歳善導大師の教えによって、浄土念仏の教えを開かれ、専ら念仏の行者となり、今まで習い集められた学問、知恵の総てを捨て切って、み仏の前に念仏申される上人は、十悪の法然、愚痴の法然房となつて、お釈迦さまと同じ、「大いなる放棄」をせられました。まことに至難な大転換といわねばなりません。

「大いなる放棄」によって、お釈迦さまの仏法と、法然上人の念仏の教えが開かれました。わたくしたちは花まつりを喜ぶと共に、お念仏の元祖とお慕いする法然上人、お誕生八五〇年を慶讃して、人間真実の幸福とは果して、何であるかを問いかえしたいと思います。

仏生会まよと呼ばるる寺娘

明浦

概念の転換

—花まつりに寄せて—



石川孝之

(横浜市正覚寺住職)

寒さ暑さも彼岸まで、といって氣候の挨拶を交わしている内、桜前線は北上を続け、万花は競い合ってその眠りからさめる。私共も、冬のかたくな気分からときほぐされて、日一日と柔和な自分を取りもどしてくる。

四月八日の釈尊降誕会がこうした良い季節に迎えられるのはうれしい事である。全国の寺院が宗派を問わず一斉に釈尊の生誕を讃えるという事もうれしい。寺院の保育園や幼稚園も、春の花で飾られた花御堂の中央に「天上天下唯我独尊」と獅子吼されて立っておられるシッダールタ（一切義成就の意）童子に甘茶をかけて祝福する光景は何とも平和そのものである。

さて、花まつりが、この様な良い季節に行われる事を喜ぶのであるが、私達は既に太陽暦に慣れ過ぎてしまつて、現在の暦の四月八日というこの日が、そしてこの様な時季が、当然お釈迦様の誕生日と決め込んで、何等不思議は感じないでいる。

だが私達の日常の暦は、つい明治五年の改暦から百十年しか経っていない。そしてむしろ、それまでの太陰暦あるいは太陰太陽暦は、推古天皇十二年（西紀六〇四年）から千三百七十八年も続いて来たのである。

従つて、例えばお隣の韓国では、釈誕日といって国定の休日であつて、今年の場合には、五月一日に行われるのである。全国の仏教寺院は、数多くの花ちょうちんで飾

られ、夜になると、信者たちがちょうちん行列を行う。

日本では、メーデーは労働祭であるから、恐らく今年も各地で労働者の集会でざわめく事だろうと思うと、何とも変な気持である。

生月日を漢訳は四月八日と記述しているが梵藏本は記さない。西域記は、吠舎佉月後半八日、すなわち三月八日、あるいは後半十五日、すなわち三月十五日としている。面白いことに、西域記の吠舎佉月後半三月十五日という日は、私達の現在の暦の丁度四月八日に合致しているのである。

私は釈尊の降尊の日時にこだわって、時季の善惡を言っているのではない。

私達の概念というのは、その社会の概念の虜になって、いつの間にか広い観念で物を見ることが出来なくなってしまうことを恐れるのである。子供の教育にしても、社会概念に押し流されて、概括化の方向に進んで行って、個性を生かせない状況にある。私は、最近面白い話を聞いた。ひろ・さちや氏の「空」の説明の中に出てくるもののだが、氏は色弱だそうで、色別について常

々夫人を悩ましているようであるが、ある時、一枚のボロシャツをめぐって、いつもながら意見が違った。夫人は、黄色に水色の縞だというのに対して、氏は、黄色に白の縞だという事になって、多くの人に確認を求めたところ、皆夫人と同様の水色を肯定したという。しかし繊維を抜きとって調べたところ、それは明白に「白」であったというのである。

つまり私達は、周囲の色との比較において色を見ているという事なのである。そして更に氏は、白が絶対的に白だと考える、そんな考え方は窮屈だし、ときには現実に悖る。黒を背景にした白と、黄色の中に置かれた白とは、白と水色の差がある。だから、白は白であると同時に水色である、といった方が良いのかも知れない。つまり絶対的な白なんて存在しない、という事が、仏教でいう空の意味するところである、というのである。

終戦後、教育制度も改められて、その内容も自然科学に基いた考え方が全ての主流をなして来ている。お蔭で私達の生活も、大層科学的に進歩した。科学の進歩と共に、仏教研究もまた大層進歩したといえる。そしてその

研究も他の学問分野と同様に、科学的な考え方の上に立つという傾向が強くなった。

その一面として、釈尊もまた私達と同様の一個の人間であったとする「人間釈尊」という概念が支配する様になり、一般社会の人々もまた、そうした概念をうけて、釈尊の教えにかかわる総てを「科学」という尺度をもつて、知識として知る様になった。総ての事象を自分の知識を基礎として見、考える。これは決して悪い事ではないけれども、そこに我執、言い換えれば、自分の概念で物を見てしまうという杞憂が屢々私をおそののである。それも、小さなせまい概念でもって。

釈尊が歩まれた道を、一度でも歩いてみたい、という、仏弟子なら誰でも持つ情念で、私もインドの旅に出たのである。

そこで知り得た胸懷——かつて私が人間釈尊として考えていたその総ての概念が、驚異的な、偉大な力の前にくずれ去るのを感じた。

「人間釈尊」という、余りにも自分的な感覚の下に、単に親しみを感ずるという今日的な感覚で釈尊を見て来た自分に、何度も強い鞭はふり降ろされた。——釈尊

は、単に私達と同じ人間ではない。偉大なる比類なき崇高なる存在であつたと。今更ながら頂礼して、このすばらしき存在があつたればこそ、と喜こびに胸をときめかせたのであつた。

帰国して私は、歴史的に事実近くに、誇張も少ないとされている馬鳴のブツダチャリタの仏伝を読み返して、以前の私には起らなかった深い感激をもつて、感じることが出来た。これは西紀一・二世紀頃書かれたと推定される古典梵語で書かれた宮廷詩である。

今、平等先生翻訳の、生誕宣言の部分を紹介しよう。

第一章 世尊の誕生

——その三三

七仙の星宿の如き彼は
惑わず、広き歩調で

高く浮彫した蓮の標を地に打ち印し、
かくも確かな七歩を歩んだ。

——その三四

「我は覚悟の為、世の至福の為生れた。

かくて、之は我が最後の生である。」

彼は獅子の歩みをなし、四方を凝視め、
かく勝れた理に充ちた言葉を宣べた。

—その三五—

二条の水は天から落ち、

月光の如く輝き、寒暑の力もち、

彼の身に快樂を与えようと

比なく賢く、仁慈しい彼の頭に降った。

私は小学校三年生の時、得度をうけるために増上寺に参って、椎尾大僧正から「何か聞き度いことはあるの？」と問われたので、問われるままに、「お釈迦様はお生れになって、すぐに七歩も歩けたのですか？」と恐れもなく言ったものです。台下は、「それはお釈迦様のご一生を七つに割って、その教えの結論として『天上天下唯我独尊』という言葉をおのべて、仏教の総てを文学的結構として、生誕の時点に表わしているのです、私達の考え方、生れたばかりの子が歩き出したという意味ではないのですよ」と、もっと易して教えて下さった様に思う。そうした小さな頃概念は、私の心の奥の方で固定化し

ているようである。

十何年か前、四月八日に鎌倉の大仏殿に何かのご挨拶にうかがった事がある。治子奥様が応対して下さって、「今朝、私のお友達のアメリカー人が『ハッピー・バースデー・グレート・ブッダ』といってくれました。花まつりを知ってるんですね」と、例のやさしい微笑みで話された事が、今も印象的に鮮やかに甦みがえってくる。

ここ数年、神奈川県浄土宗青年会の人達が、母子寮で花まつりを催し、贈り物をして大層喜ばれている。花まつりに合わせて戦没者の慰霊祭を催している寺もある。

本当に素晴らしい事であると心暖まる。全国の寺々を中心に、小さな概念にとらわれず、心底から釈尊がこの世に現れたもうた事を喜び讃えると共に、その教えに真剣に耳を傾け度いものである。

時あたかも、宗祖法然上人のご生誕八百五十年に正当する。上人のご法語に、「されば念仏は弥陀にも利生の本願、釈迦にも出世の本懐なり」と仰せられた無分別智をしっかりと戴いて、「願わくば大衆とともに」花まつりを、そして宗祖のご生誕を心から讃えたいものである。

◇◇◇

法然上人お誕生八五〇年に寄せて

◇◇◇



勢至像こぼれ話

— あれから五十年はすぎた —

高橋良和
たかはし りょうわ

はなしは五十年前のことである。その年は昭和七年であった。もう想像がつくと思うが、法然上人お誕生八百年の年である。

京都の東山、知恩院の境内に、法然上人の幼児、九歳の幼名勢至丸像を建立することになって、その資金を全国の日曜学校、子供会の子供たちから募金することになった。

その年は前年の昭和六年の春からであった。たしかビシク色のハガキ大の封筒に主意書を印刷して、全国の児童協会（当時の浄土宗宗務所にあった連合団体）から呼びかけた。

このような募金は浄土宗はじまって以来のことであつたらしいので非常な反響を呼んで、当時朝鮮、満州、樺太、台湾、そしてハワイなどの各国教区からの子供たち

の募金へ場があつて予想以上の成果をあげて十銭募金によつて、十数万円が集つた。

そこで当時の帝展審査員（日展の前身）である彫塑家の石本堯海氏が制作したのか、勢至丸の像である。

正座して合掌しているこの幼形像のすがたは、その後各宗に大きな刺激となつて、そのあと比叡山上に伝教大師の童形像がつくられ、つづいて親鸞聖人の幼児像も建設される動機となつた。

その勢至丸像は今日まで知恩院山門の華頂学園の筋向いにちゃんと建っている。しかし戦時中供出されたが、それも目度く帰還して、昔のままのすがたであることは、とてもうれしい。

ところでこの銅像についてのこぼれ話がある。

というのはこの銅像は、道路に面して斜めに建てられている。

それについてよくこの解説をする街の観光案内者は、このような解説をしている。

この銅像は、法然上人の幼児のころのすがたを建てたものであるが、このように斜め向けて建てるのは、

法然上人は、比叡山において修行したのであるが、淨土宗を開いたのちも、比叡山が思い出されて、比叡山のほうを向いて建てられているのである、とまことに穿つたような解説をしている。

というのは、この銅像の建立のときに手伝つて、それから五十年すぎた今日、法然上人の八百五十年の勝縁に遇つたのは、どうやらわたし一人らしい。他の先輩たちは、当時三十歳や四十歳の方々であつたから、いづれも他界している。当時二十歳の青年であつたわたしは、それらの先輩のなかにまじつてお手伝いさせていたのだので、今日二度の勝縁に遇うことが出来たので、今のうちに当時の事情を記しておくつもりでこの文を書きとめている。

街の案内人のこの説明は、非常にありがたいが、当時としては、この銅像を台座の上にのせて安置しようと、像座の台にのせたところ、道路に平衡して正面向きにしたところ、朝は東からの朝日で、右半分が黒くなるし、夕方は夕陽で、左手が黒くなる。そこでこれでは具合悪いというので、この斜め向きの位置したことによつて朝

夕の光線が、勢至丸の顔に平均にあたるといふことからこのような位置に建てたのである。

この街の案内人の説明は、まさに怪我の光明であつて、その後ここを通る人たちの間には、この案内人の説明が通説になったのは、この銅像建立を手伝った人たちは、知る由もないことである。

その銅像の前の石柱にはわたしらの勢至丸さまと彫られている。この字は申しあげておくが、法然上人の伝記である四十八巻伝のなかの文字から、一字一字拾つてつづいたので、原文の文字そのままであることも知ってほしい。

ときどき珍しいことにふれる。

それは「わたしらの勢至丸さま」の石柱の文字を読んで「勢至丸（がん）」というのは、なんの意味かといつて通つていく若い人もある。笑うに笑えないことで、教養が邪魔しているのかもしれない。

ところがこの勢至丸の銅像が、わたしが戦時中出征したあと、昭和十九年の春に供出したのである。

供出というのは、戦時中のことで弾丸になるために、この銅像から、錫と、銅とを選択して、弾丸を作る材料

になるためである。

その供出の知らせをうけとつて、びっくりした。そのとき心に去来したのは、あの銅像が供出されるようでは、日本もおしまいだと思つたからである。

そのとき石の台座は、残っていますと書き添えた便りがあつたのであるが、台座だけでは仕方がないとあきらめていた。

そして昭和二十年の年末、やっと復員したとき軍服のままで、あの台座の前に立つたときには、涙が出て仕方がなかった。

しかしそのとき心に去来したのは、この銅像は、どこかにまだ処分されずに残っているのではないかということであつた。

それで当時元氣であつたこの銅像を鑄た高橋才三さんにこのことを電話した。まだ終戦後のどさくさのときである。才三さんの曰く、

いや、わたしもそう思います、わたしが軍の命令で台座からおろして兵器廠にもつていったのですから、もう一度探してきます。

ということであつた。なんとかして銅像の無事であるようにと、数日の間首を長くして待っていた。

ところがうれしい吉報があつた。

銅像はあります。師団のくず鉄のあつめてある置き場の溝のなかに逆さにしておいてあります。

と。それなら早いほうがよいというので、すぐに手配して、銅像のもらい受けに才三さんが奔走してくれた。

そして昭和二十一年の四月七日の法然上人の誕生の日、銅像帰還の遷座法要を営んでもらつたのである。

そこで他の銅像が、ほとんど弾丸になつてしまつてゐるのに、どうして勢至丸の銅像が残つたのか、それを調らべると、はなしはこうである。

あの銅像を溶かすことになつて、まっ赤に燃えている溶鉱炉のなかに入れようとしてもちあげてみると、まことにかわい子供のすがたで、その上まるですがるやうに手を合わしている子供像である。

人夫はこれを見ると、こんな子供像まで溶かさなく

てもよさそうなものを、と、それをそつとおいたらしい。

それから何度か、この像を同じようにもちあげたところ、なんとしても合掌のすがたに心うたれて、遂に溶鉱炉に入れることを断念したということである。

それがために、この銅像は溝に投げられて残つたのである。勢至丸の像は、傷一つなくかえつてきた。

そのときのことばをもう一つ。

他の銅像は、刀をもつて立っていたり、腕を組んで威張つたすがたで建てられているのに、この銅像は子供であつて、その上に手を合わしている。このすがたに心うたれたと、兵器廠の人夫のこぼれ話も聞いた。

手を合わすことが、いかに尊いことであるか、銅像が物語っている。

銅像が建てられてから五十年はすぎた。

早いものである。そして今また法然上人の八百五十年のよき年を迎えるのである。

昔を思い出して五十年前の思い出をつづつてみたが、当時の人と追想したいと思うが、あの銅像をつくるとき手つだつた人は、もういない。

歳月のすぎゆくのが、早いことを今さらに感じている。

〈随想〉

ほとけとの出会い (七)

佐^さ竹^{たけ}隆^{りゅう}三^{ぞう}

(大正大学教授・医博)



さきに考察しましたように、南北朝末より隋・唐

初およびその後、慧思の末法思想の高揚による
 仏教興隆の念願の吐露、末法思想的な傾向の下に
 見出される信行などによる三階仏法の提唱、今時末
 法を強調する道綽およびその後の伝統における浄土
 教の展開がみられ、中国仏教全体に亘って、そこ
 に、いかに末法滅思想的な意識の中に仏教復興が
 計られてきたか、その一端を知らしめられようので
 ありますが、なお隋・唐初に亘り、律の道宣、法相
 唯識の窺基などにより、北支長安方面を中心に末法
 思想の昂揚がなされていることは注目しなければな

らないと思います。

末法滅思想それ自体が、釈迦仏教滅尽といった
 法滅思想の中に、第二の釈迦、未来仏としての弥勒
 出現を期待する思想を孕んでいるのであります。

末法思想それ自体としては、末法の凡夫易行主義
 を説く浄土教に比較的親しみが多いといえますが、
 末法滅思想が恒に次の新しい仏教を用意するもの
 であるという意味では、浄土教的系流のみに限ら
 ず、仏教全体に亘り受けとめられていったことは必
 然的なことであつたと思われます。しかも、それは
 つねに未来仏弥勒を用意するものであることが注目

されるのであります。

最初仏滅後五・六百年にして正法法滅思想がとくに注意され、中国においても、仏教東流してより五・六百年である南北朝末より隋唐初においてとくに正像末法滅思想が特別に留意し整えられてゆき、このような中国の末法思想を背景とする日本の末法思想がまた、仏教伝来以来、五・六百年を経過した平安期中末期より鎌倉時代にかけて、とくに意識的に取り上げられてきたことは興味深いことであり、しかも、このような「正法法滅思想」、「正法像法法滅思想」、「正法像法末法法滅思想」のいずれもが「法滅」という危機感の中に新生の仏教を用意し、正像末といった時間的歴史性に関わりつつ、それを超える今日今時の絶対現在時に立つ真実仏教となるものを提唱したことは、末法思想の本質的な特質として注意されるのであります。

日本において、末法思想を最初にとり上げているものは、平安朝仏教の最初の代表者の最澄であります、その「正像末文」(伝教大師全集三卷)、「授菩

薩戒儀」(伝教大師全集四卷)、「守護国界章」巻上の下(伝教大師全集一卷)、「願文」(伝教大師全集一卷)の中に、彼の意図と熱意とを明らかに読みとることができると思います。

また、最澄と末法思想については、「末法灯明記」(伝教大師全集三卷)が想起されるのでありますが、このなかに示された末法思想は、鎌倉仏教徒、とくに鎌倉新仏教徒に影響する所が多く、いわゆる鎌倉仏教興起の強い支えとなつて、いることが注目されます。

その後、天台系統では、円珍(授菩薩戒儀註)、禪瑜(新十疑論)、千観(十願発心記)などが末法思想に注意しているようであります。

さらに、源信(往生要集)、南都の三論宗系統の永観(往生拾因)、珍海(決定往生集)、運覚(本朝新修往生伝)、皇円(扶桑略記)などに見られるように、平安朝末期に至ると、全般的に末法法滅意識を強めつつ、しかも、そこに、新たな真実の仏教、真実の仏教的な実践を望み、首唱されてくるのであります。

それらを讀みますと、いかに平安朝末期の既成仏教界が形骸化し空洞化し、自己の名譽や利欲を満足せしめるようなものに墮落し切っていたか、その一端を想像することができるのであります。

このような平安朝末期の末法滅意識の中に、皇円に学び、永観の念仏などに注意する鎌倉新仏教の先駆者法然などが出現してくるわけですが、いわゆる「鎌倉仏教」と称せられるものが、末法思想を基盤として展開されてくることは、歴史的必然と言ってよいのではないのでしょうか。

法然（『選択本願念仏集』）、貞慶（『愚迷発心集』）、栄西（『興禪護国論』卷上の「第三世人決疑門」、高弁（『推邪論』、『華嚴仏光観法門』）、親鸞（『教行信証』）、道元（『永平広録』）、日蓮（『願仏未來記』）など、いかに、鎌倉時代の新旧仏教界の真面目な仏教者が真剣に末法思想を基盤として、各自の仏教的な主張、その実践を展開してゆこうとしていたか、その一斑を付度せしめられうるであります。

末法濁惡世の現在時点に立つて、その主張すべき所を強く打ち出しつつ、しかもそれを超える三時通

入という時間性、歴史性を超える場にその主張すべき点がち込まれて展開してゆくのが、法然・親鸞の主張の特色的な点であります。

それは、末法・法滅の今時という相対的な時間性に、直接しつ、しかも三時通入という絶対性・永遠性・不滅性に帰着せしめる思想なのであります。

栄西は「興禪護国論」において、末法に禅法の絶えることを慨歎しつ（『日本仏法中興願文』等参照）、しかも「般若経」などの教説により、分と言ひ、時と言ひ、正しく今日禅法の行なわれるべきことを強く主張し、その「第九、大國説話門」の下では、日本は正しく禅の行なわれるべき勝地であることを説き、末法法滅観に伴う日本辺地観までも超えて、禅仏法の絶対的存在性を強調し、その実践を極力主張し、また道元は、末法辺地の今日と末法思想を強く打ち出しつつ、しかも「正法眼藏弁道話」において、祇（只）管打坐・禅定への専念を力説し、「大乘仏教には正像末法わくことなし、修行すればみな得道す」等と、禅の三時超越性、その絶対的存在性を強調しております。

貞慶が末法五濁惡世・無戒無智の愚僧と悲歎しつつ、しかも戒律を厳守し〔戒律再興願文〕＝日本仏教全書参照、性唯識一心の体験に徹底すべく主張し〔必要鈔〕大正蔵七一卷参照、高弁は末法辺地の非人高弁と内省しつつ、しかも華嚴仏光觀の行に徹底すべくはげしい修業を実践しています。

日蓮は、日本の現状を仏滅二千年後の末法惡世の災害みちみつる時とはげしく指摘しつつ〔撰時鈔〕等参照、日本国の棟梁・日本国の柱と自認し、「法華經」による唱題目の広宣流布を提唱して、その「曾我入道殿許御書」〔日蓮遺文〕に仏教の伝来につき、「正像二千年には西より東に流る。暮月の西空より始が如し。末法五百年には東より西に入る。朝日の東天より出するに似たり」と述べ、「神門御書」に、「しかるに我日本国は一閻浮提の内、月氏漢土にもすぐれ、八万の国にも超えたる国ぞかし」等と説いて、日本国・日本仏法の勝れていることを力説しております。

そこには、共通的に、末法法滅思想を時代思潮として素直に受けとめつつ、その現在時点の深い内省

体験より、新たな絶対性、永遠性をもった仏法を打ち出されていることが注意されるのであります。

末法思想は、既成仏教の墮落とそれに伴う既成仏教の滅亡とを具体的に受けとめつつ、釈迦仏教の本源に帰り新たな真実の仏教を首唱する、釈迦復興思想・真実仏教再生思想を必然的に展開するものといいうるであります。

鎌倉の新仏教が墮落しつつあった既成仏教界より迫害を受け、それに伴う政治的な弾圧などに甘んじなければならなかった実状は、インド・中国と展開されてきた末法思想を身をもって素直に受けとめ、勇気をもって、三世通入と自負される真実の仏教・絶対的永遠性をもった新仏教を提唱せざるをえなかったと理解されるのであります。

いずれにせよ、末法思想は、正法法滅思想・正法像法法滅思想と同じく、末法法滅思想ともいうべく、末法法滅の現実直視の中に、真実であり絶対永遠的存在である真仏教を時代に即して再構成し、強く主張するものであったと理解されます。

しかも、仏教それ自身が、時間論的には、現実の

今の場に立ちつつ、それに直接して今の場を超える、時空超越の絶対的体験を現成してゆく底の性格のものである意味において、つねに、末法思想は深く時間性・歴史性にかかわりつつ、なおかつ時間性・歴史性を超える釈迦の正法・真実の仏教を現実的に具体的に提唱してゆかざるを得なかったのであります。

現代は空前の「仏教ブーム」であると言われてい

ますが、寺院は荘麗さを誇っていますが実際のわたくしたちの生活の中に仏教が一向に滲透していないという現実を直視するとき、わたくしは鎌倉仏教の先覚者たちの言葉に、もっと謙虚に耳を傾けねばならないと思います。

寺院の観光化、仏教徒のコマースヤリズム、多角経営化などを考えますと、末法思想はまさに現代的な意義のある問題であるように思われます。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

翔 ぶ (二)



戸板に乗せられ、軽便鉄道に揺られて、私が松山市内の駅近くの外科病院に運ばれたのは、事故が起こってから一時間以上経っていた。上りの最終列車が通過する直前だったので、そのぐらいの時間で行き着けたが、もし列車の出でしまったあとだったら、私はおそらく出血多量で死んでいただろう。運がよかったというほかはない。右腕の付け根の傷は八針ほど縫われた。麻酔もなにもしない、いきなりグズグズやられたので、かなり痛い手術であった。しかし、ただ縫い合わせただけのことであるから、これが果たして手術と言え

きの
した
りゅう
いち
木下隆一

(随筆家)

るかどうか……。いまでも醜い傷が残っている。

傷口がふさがっても微熱がとれず、軽い咳が出る。家の近くの行きつけの病院で診てもらったら湿性肋膜炎だと言われ、肋膜に溜った水を、背中に馬の注射に使うような大きな注射器を突きさして抜かれた。真黒に変色した血液やリンパ液を、そんな注射器に二本半近く抜いて最初の治療は終わった。

「あと一、二回やればいいだろう」

顔見知りの老医はそう言って、「外傷による出血性肋膜炎」の診断書を書いてくれた。少なくとも

もあと一、二回この痛い治療をしなければならぬのかと私はうんざりしたが、「尚、今後一カ月の安静を要す」という診断書は有難かった。これでゆっくり寝ていられると思ったからである。安静にしている間、吉川英治の小説ばかり読んでいた。友人が貸してくれた「三国志」は何度読み返したであろう。警戒警報が出ると一応それなりの服装は整えるが、防空壕にはいるでもなく、空襲警報の発令より早く頭上を通過して行くの爆音を聞いていた。迎撃戦闘機のない松山基地と、それに付随する、これといった軍需工場も軍事施設も持たない松山の町は、おそらくその頃の攻撃目標からはずされていたのであろう。だが、それは束の間の平穏でしかなかった。七月二十六日の夜、約六十機のは旧市内のほとんどを焼きつくし、燃えさかる炎で巨体をバラ色に染めて、全機悠々と引揚げて行った。

一切は烏有に帰した。身につけていた物と防空壕に入れてあった僅かな物だけが、我が家の全財産であった。以後死ぬまで、母は一枚の着物も作

らなかつた。リュウマチで起居が不自由だったこともあるが、「着物がお米に替わる御時世でもなし」と達観していた。八月十五日の終戦の詔勅は、よく聞きとれなかつたせいもあって、敗けたという悔しさはあまり感じなかつたが、これでもう翔べなくなるのかという不安が私の胸をふさいだ。九月には善通寺で第二期の滑空訓練が行われることになっていたのである。溜息をついて見上げた空に、何千何万という赤とんぼの大群が翅をシワシワ鳴らして飛んでいた。小さな赤とんぼでも、それほどの大群になると、翅の音が聞こえるのである。いまにして思えば、私にとって赤とんぼの翅の音は上空への挽歌であつた。

私の予感通り、戦勝国は日本人による一切の飛行と航空機の製造を禁止した。そのしっぺ返しをかつての連合国である欧米諸国はいま受けていることに気づいているであらうか。航空機に傾注されていた頭脳と技術は散らばって他の分野で再生し、鉄鋼に、船舶に、自動車に、精密機器に、エレクトロニクスにと発展して行った。現在経済摩

擦の原因となつてゐる諸々の萌芽は、すでに敗戦の日に生まれていたのである。明治以来流入する学問と技術を貪婪に吸収し消化し、それを土台に創意工夫をこらした頭腦の存在と、勤勉な国民性を無視した結果がいま出てゐるだけの話である。

日本の空から飛行機の姿が消えて以来、昭和二十五年三月、受験のため上京した時、空を切り裂くように翔んでゐる二機編隊のジェット戦闘機を見るまで、私は飛行機を見たこともなければ、爆音すら聞いたこともなかった。キーンという爆音のする方を見ても、そこに機影はなく、十字手裏剣に似た機体は、遙か前方を翔んでゐた。僅が五年足らずの間に、こんなにも進んでいたのかと、私は呆然と点となつて消えて行く機影を見送つたものだつた。

やがて日本航空が再開されて、民間人の手に大空への手懸りが掴め、学生にもグライダーの搭乗が許される氣運になつたのは、昭和二十七年になつてからであつたように記憶している。やるぞ!! と私は明日にでも翔べるような氣になつて張り切

つてゐた。慶応の航空部は戦前からの伝統があつたからである。しかし、その私に冷水を浴びせたのが「もく星号」の墜落であつた。操縦士がアメリカ人だつたこともショックだつた。完全に、大空を日本人の手に取り戻したと思つてゐたのに、依然として主導権はアメリカに握られてゐたのである。それよりもショックだつたのは、私がグライダーに乗ることを半ば認めてゐた母が、それを契機に頑として反対し始めたことであつた。こんなに頑固な母を私は今まで見たことがなかつた。「日本の空は日本人に任せときやよかつた」そんな捨て台詞を吐いて諦めるより他に、私にはなすすべがなかつた。自らの手で大空を翔ぶ——という私の夢は、この時完全に断ち切られてしまつたのである。未練は大いにあつた。三田の図書館の上を朝な夕な舞つてゐる鳶が無性にうらやましかつた。「三田は懐かし」という詩を書いたのも、その頃であつた。

三田は懐かし 丘の上

我が学舎の まなびや あるところ

図書館の煉瓦の塔に

朝の光が輝けば

中空に始業の鐘は鳴り渡る

ああ 三田は

三田は懐かし 丘の上

我が学舎の あるところ

稲荷山演説館を

囲む木立に蟬鳴けば

雲の峰海の彼方に湧き上がる

ああ 三田は

三田は懐かし 丘の上

我が学舎の あるところ（以下略）

この詩の中には鳶は出て来ないが、近くのイタリ

ア大使館の大木に棲んでいた二羽の大きな鳶が投

影しているのである。また、銀座の松屋デパート

の屋上から東雲の飛行場に発着する小型機を小半

日眺めていたこともあった。そしてもう二度と操

縦桿は握るまいと思いついた。なお相当の

時日を要した。空を翔べないのに、地上を走る自動車なんて……、自動車のハンドルさえも拒否して現在に到っている私の態度は無論馬鹿げているが、焼け出されて以来、二度と着物の袖に手を通さなかった母の姿と一脈相通するものがあるようで、時々おかしくなることがある。

初めて飛行機に乗ったのは、随分あとになってからで、昭和三十四年生まれたばかりの娘を連れて塚口の父のところへ帰ったのが最初であった。直行便がとれなくて、名古屋経由の双発の小型機であった。家族連れで乗るのは嫌だなど、ふとその時思った。事故のことが頭の片隅にあったからであろう。一人で乗る方が気は楽である。そうは思ってみても、飛行機に乗るとなれば大抵の場合家族連れということになってしまう。

娘の記憶に残っている最初の飛行機は三歳になった時のものであろうかと思う。少し贅沢かなと思ったが、娘のために座席を一つ予約した。ところが二重売りになっていたらしく、「料金はお返し致しますから、お子様は膝の上に乗せて頂けま

せんでしうか」とスチュワードに言われた。

「どうする？」と娘に聞くと、「わたしのお席だからイヤ」と娘は権利を主張して譲らず、結局席のない男の人は大阪まで補助席に坐って行くはめになった。娘はベルト着用のサインが消えると、大阪空港に着く直前まで窓際に立ちっぱなしで、景色ばかり眺めていた。気の毒したな、こんなことなら席を譲ってあげればよかったと思ったが、後の祭りであった。

「どうだった？」

と父が飛行機の乗り心地を聞くと、

「空は青かった、雲は白かった」

と、娘は答えた。

「おお、そうかそうか。ひろみはなかなか詩人じやな」

孫の答えに満足して、父は相好をくずした。そんな父を見て、母は、

「ああいうのをチヂバカと言うの」

とニヤニヤしていたが、満更でもない顔をしていたから、こちらも相当なバババカであることに

違いなかった。

それから約二十年経ったいま、娘は自分でささと搭乗券を求め、荷造りをして、極く当り前の顔をしてアメリカと日本の間を往復している。手間はぶけてこちらは気楽だか、多少淋しい気がないでもない。滞空時間も私を大幅に上回っているはずである。三月にはカリフォルニア州のサンジエゴからインディアナ州のインディアナポリスまで翔んで大学院入りすると言って来たので、先日くれぐれも気をつけるよと電話をしたら、

「十二日のTWAに乗るわ。お食事がいいからTWAにしたの」

と、娘の返事は屈託がなかった。TWAは豪華な機内食を売り物にしている。

「海亀のなんとかというのがあったら、この前俺が食ったやつ。あれはやめておけよ、うまくなかったから」

「はい、私も今度はチキンをやめて、ステーキにしようと思っています」

(つづく)

還相行の聖者

勢至丸の誕生



賀 か
幡 ぱた
亮 りよう
俊 しゅん

(京都市九品寺住職)

○
今年(ことし)は勢至丸の生誕八百五十年である。勢至丸は文字通り、御両親が仏神に祈願して授かった子宝であった。
うるまのとき
漆時国を父に秦氏(はたけうじ)を母に、長承二年四月七日美作国久米南条稻岡庄という今の岡山県誕生寺のある地に誕生なされた。勢至丸の生涯は、伝記によると教えきれないば

かりの、不思議な事実を伝えている。偉大な宗教家の伝記や史伝部の経典は歴史上の人物が語られているのに、超人間的要素が多く、三次元の感覚からはみでた部分については、伝記作者の誇張か粉飾として、誰もがそうするよう、さりげなく読み流していた若い頃の私と、現在の私とでは別人の思いでこの原稿を書いている。称名念仏が阿弥陀仏の本願であることを明確にされた、唐の

善導大師の著書である観無量寿經疏奥書の部分、或は梅の尾の明恵上人の夢の記、そして法然上人の不思議な行状などについて、私はそれが真実であることを確信する。こんなことを書く、ある方は、あんまりそんなことを言うのはどうか、と注意して下さるむきもあるうが、あえて私はこの事にふれたい。

○
法然上人伝は上人の滅後約百年余りの頃、複数の伝記作者によって、絵巻物としてまとめられたという。知恩院にはその絵巻物があり、国宝法然上人絵伝四十八巻がそれである。上人がなくなられて久しくすぎると、真実の事どもがうすれていくので、人々が忘れないうちに聞き集めて、まことを選びあやまりを正して記しておく、と伝記はいう。百年余りの年月は約三代に相当する。親から子へ、子から孫への伝えは、比較的正確に伝えうる期間であると考えてよい。四十八巻伝の学術的研究は、すでに今は亡き岸信宏親下をトップにするグループにより、大著研究編が出版されているが、私は別の立場から勢至丸の誕生をめぐる問題を取り上げてみたい。

○
春四月一族の希望と期待を一身にうけて誕生された仏陀釈尊の伝記と、わが勢至丸の誕生とは、どこか共通するものがある。約二千五百年前インドのマガダ国の王子として、この世にお生れになったゴータマは、四月八日生れて、御母マヤ夫人はゴータマ懐妊のとき白象の夢をみられたという。白象は普賢菩薩を象徴するから、ゴータマの前生が菩薩であることを予想させる。マヤ夫人はお産のために生国へむかわれる途中、コーサラに近いマガダの花園で安産されたのであるが、そのとき落花さかに小鳥は唄い、空中同時に音楽を奏するような光景であったという。また天地が六種に振動したというから、はげしい雷鳴があったのであろう。私もインド旅行中、宿舎に入ったとたんに、すごい雷鳴がひきつれたスコールを経験している。停電した室内から眺めた窓外の景色は一変していた。建物の周りの地面は水没し鮮やかな色とりどりの花びらが一面に浮んでいる。まるで池の中の亭に居るような気がした。それは一瞬の出来事で、經典の六種振動が現実性をもってせまってきた感じである。

空中音楽を雷鳴までも含めた意味に理解するならば、伝記の解釈も現実的にうけとめることもできようかと思うのである。勢至丸の誕生には、紫雲天にそびえ屋敷内の家の西にある椋の大木に、二流れの白幡がとんできて梢にかかり鈴鐸がなりひびき、七日のちに天にかえったというのも、晴天に春一番の強い風が吹いて、風土にある仏閣の鈴鐸の音が聞え、どこかに干してあった布が散ってきたのであろうか、数日して布のことを思い出して、みるとなくなっていたのを七日のちに天にかえったと伝えているのだろうか。小児のゴータマが七歩あるいて右手を上左手を下に指さして、天上天下唯我独尊と称えたという伝えの相似性は、七という数字が、六道という迷いの世界を超えた悟りの境地を意味する。地上に舞いおりた椋の梢にかかった白幡が、天へのぼると表現することにより、勢至丸がゴータマ仏陀の再来とみることを如実に示している。六道輪廻転生の因縁を解脱した菩薩が、衆生済度のために両親をえらんで人間の子として、相を現する意趣生の人として勢至丸を語ろうとしている。

天台大師童稚のころ西に向い合掌するくせがあったと

伝えるが、勢至丸も童児の頃よりややもすれば西の壁に向うくせがあったという。ゴータマは生後まもなく亡くなられたマヤ夫人を偲ばれてか、華やかな王宮生活の中で孤独を好まれ思索にふけられたといい、青年ゴータマは教官たちの教えない生老病死について、城外の現実から疑問を深め、遂に意を決して父王や妻子を城にのこして出家する。ゴータマは子ラーフラを父王の後継者に残すことによって、当時の社会慣習の条件をみたした出家である。勢至丸の場合は出家の機縁は胎児の時から準備されている。秦氏は剃刀をのむと夢みて懷妊するが、時国は汝がはらめるところさだめし男の子にして一朝の戒師たるべし、と言ったという。剃刀は利滌を象徴するが、剃度のときに用いる剃刀と結びつけて、授戒師を予測する時国に、並々ならぬ仏縁の深さを感ずるのである。

勢至丸九歳の時、中央政府派遣の下級官吏であった時国は、血統のよさを慢ずる心から、豪族明石の源内武者定明の恨みをもって夜討ちにあう。小児は物かげより庭にいる定明をみて、小矢にて眉間を射たという。父は頻死の床に小児をよび、敵人を恨むな是れは前世の宿業で

ある。仇討ちは世々につきることがないから、早く出家して菩提を弔い、自ら解脱を求めよ、と遺言し西に向い端坐合掌して仏を念じ、眠るが如く息絶えたという。武士社会では夜襲をうけ父を亡^{うしな}った遺児のなすべき道は仇討ちであった。ところが時国は自分の死によって勢至丸の出家を、決定的なものにした。もし時国の事件がなければ、勢至丸は武士の子として成人したかもわからない。また父の遺言が仇討ちをせよということであれば、小矢稚児とよばれるほどに武士のたしなみを身につけていた童子としては、目前で父を討たれた敵への復讐^{しゅう}心は強いだろう。父は仏神より授かったいとし子を仇討ちにまきこみたくなかった。死を前にして父は思考をフル回転させた。武士の子として堂々と振舞うに違いない利潑な息子を、安全に立派に成人させる道はどれかと。父はとっさに判断した。日頃の信仰や仏教的教養が出家をうながす遺言となり、自身も敵を恨まず西方往生を念じてなくなっている。平安時代に活躍した恵心僧都の唱導による西方往生思想の信仰が、時国の最後を崇高なものにしたとみてよい。ゴータマの余りにも早い生母との死別や勢至丸の父の不意の死は、世間的心情からいえば不俾

なことだけれど、その避けられない事実をどのように受けとめるかによって、人生はきまる。彼等にはそれが人生の転機となり修道を決断するためにのみ作動したのである。

父の遺言に従って、勢至丸は叔父の観覺得業について仏教の学問をはじめめる。童子の学解は一をきいて十をさとする秀才で記憶抜群であったため、叔父はその才が辺地に埋もることを惜しみ、当時の仏教センター比叡山に登り学を究めるように勧める。勿論童子も父の遺言忘れがたく、母にその許しを乞う。有為をいとい無為に入ることが、母に対しても真実の報恩行であることを再三説明すると、かたみとてはかなき親のとどめてしこの別れさえまた如何にせん、と嘆きつつ承諾する母であった。夫の不意の死だけでも涙がとまらないというのに、形見に残してくれたこの子とさえ別れて生きねばならぬとは、切ない胸の中を口に出さずにいられない、つらい別れである。岡山から京都まで一時間という距離感ではない美作国から山城国までの道は遠い。ゴータマも勢至丸も、恩愛の情をふりすてて出家する心根に、一切衆生救済の聖願を秘めている。時に勢至丸は十五歳、矢張り母を説

得するのに大きな役割りを果たしたのは父の遺言であつたにちがいない。



観覧は勢至丸を延暦寺に送る状に、進上大聖文殊像一体と書き、彼が文殊菩薩に匹敵する俊才であることを披歴しており、勉強を積むにつれて一山の碩学皇円に、かえって師の礼をとられ、山にとどまって天与の座主になり給えと願われたが、名利をさげ隠遁の志厚い出家者法然は、二十四歳下山して再々道を求め、遂に善導大師の観經疏の一心専念弥陀名号の文によって、浄土門の開宗を決意されるのである。法然上人は晩年、讃岐国生福寺に脇士勢至菩薩像をつくられた時、法然本地身、大勢至菩薩云々と書きおかれ、また弟子勝法房が上人の真影を書いたその御銘に、我本因地、念仏の心を以て無生忍に入る云々と授けられ、多くの文中に勢至の御詞を自賛に用いられているという。幼名を勢至丸と名づけられたことといい、勢至菩薩の再々にわたる還相行の自覚を表明されているのは、まさに上人が三昧発得の聖人だからこそその実言である。上人は選撰本願念仏集に、善導大師が

三昧発得の聖人だから偏依善導の立場をとることを明記されているが、上人自身が三昧発得の聖人でなければ、善導大師が三昧発得の人であることを知る由もない。本地身を自覚する宿命通も、三昧発得の故に体得された境涯である。三昧発得後の上人は、眼より光を出し暗夜に灯なくて光りあり、九条関白兼実公がみられたという、上人が空中に蓮華をふみ給う御姿といい、何れも還相行の聖者なればこそと思える今日このごろである。

△幼児用▽ 教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共一二ページ（カラー刷）

定価三〇〇円（送料実費）

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十一六

大道社

アーノルド・A・ハッシュネーカー著

『幸福への意志』（佐藤光兆訳）

現代社会の、不安にしかつ喧噪なざわめきが、ここにも聞える、そこにも聞える。幸福を求めてやまない人々の挫折が、はかない人の生命のむなしさを残して、ここで消えて行く、あそこで消えて行く。二十一世紀への展望は、夢の現実のギョッパの中で、多くの人々の悲しい犠牲によってあがなわれ行く。

こうした現代の不穏な響き、不協和音の連続線の中で、私たち、この小さくして、か細き人間の、はかない営みは、まことに消え入るばかり、肉体をついばむ苛酷な生活のなりわいに、かてて加えて精神の障害をも引き起こす社会的葛藤のさまざまな要素。私たちは今、孤独な生の旅人としての私たち自身への数々の試練の前に、適応能力をそがれて次第に衰えて行くことである。

このような現代に、このような時代に生きる私たちに、一つの警告を与えようとしてくれるのが、アメリカの精神医学界を代表する臨床医、アーノルド・ハッシュネッカー博士

である。博士は、長年にわたっての精神身体医学の業績にもとづいて、人間の生きることの幸せ、人としての至上の願いが、すなわち「幸福に生きる」ということである点を重視し、幾つかのすぐれた実践の功績とともに、『生きる意志』と『幸福への意志』という代表的な二著作を著わされている。佐藤光兆氏の翻訳によって、すでに先年『生きる意志』が公刊され、今また『幸福への意志』が訳された。「生産的かつ目的ある解放」に向けて、人は幸せを分かち合い、喜び合いながら生き続けなければならない。そのことを強く訴える本書を、ご希望の方は、左記に連絡されたい。

東京都港区白金台二一七一丸

TEL (〇三) 四四一一三八五三
International 学術振興会

浄土句集

一田牛畝選

東京 田中 秀代
木場堀の木の香ただよう初荷かな

評 木場堀から次から次に初荷が運ばれて行く。その木材から木の香がただようといふとは、如何にも初荷らしい。

河豚料理五十回忌は祝めく

福岡 原 敬二郎

物書くも読むも綴るも炬燵かな
東京 満尾有衣子

評 五十回忌の法事は父親ならん。早く父

に死なれたが、親族縁者のお蔭で成人し、お世話かけた人々を呼んで法事を営んでいるので、法事が出来るようになった祝いで、河豚料理とは喜ばしい事である。

評 年老ゆれば、総てが面倒臭いのである。食事を読み書きも総て炬燵にてすましてくなる。炬燵からの出たり入ったりも、寒さの為に面倒になるのは年のせい

いか。

群馬 島津 か寿

諸音の消えし都の大旦
東京 猪瀬 幸子

山門に十夜法要の揭示板
福岡 上滝津弥音

針蛸の失せたる老も針まつる

評 年取れば目もうすくなり、針仕事も出

来ぬようになり、針蛸も消えていても針供養だけは忘れずに続けている。

評 大晦日まであんなに騒々しかった東京の町も、除夜の鐘も終りて元旦ともなれば、諸音が消えて初鶏が鳴いて、静かな

年を迎えることが出来るのである。

凍てきびし米寿の母を想ふ日々
東京 細田 初枝

月拌み母の面影しのびけり
三重 森 静枝

東京 栗原やえ子
外人と一期一会やクリスマス

東京 小笠原香祥
梅一枝結ぶ湯島の破魔矢かな

福岡 前田 秀峰
菊日和総裁よりの感謝状

東京 真野 竜
手をひかれ入りくる孫の御慶かな

東京 末常てる子
二月堂今ひつそりと春を待つ

福岡 永江 隆説
植紅葉して静かなる祖師の廟

東京 新井 新生
吾もまた日々好日や福寿草

東京 栗原とも子
待春の縫目こまかに紅の糸

福岡 安藤平次郎
冬草に子等の足跡浅くつく

東京 阪入志津枝
初明り目出度き事のある兆し

東京 吉原登起子
呀ゆる月林に登り高々と

福岡 釈河野ねはん
咲き初めし秋蘭の花よく匂ふ

福岡 荒牧 還愚
探梅の友饒舌を好まざる

東京 吉田ゆきゑ
早春の托鉢僧や浅草寺

福岡 植藤みきを
玉狙ふ竜さながらに月に雲

山口 上野 明達
筆跡に以心伝心年賀状

福岡 深井 鉅士
仏壇を灯して心暖かく

福岡 林 澄山
寺の池透けて寒鯉美しく

福岡 服部 光代
部屋の名も浅間妙高紅葉宿

福岡 世利 武朗
春の風邪孫から貰ひ爺婆も

長崎 増田いと子
滝に居て通り雨には気付かず

東京 真野よし子
新年の白き句帳の一頁

大分 丹羽 難中
寒ゆるむ祖山本日門主葬
檀越を連れ本山の御忌導師 一田 牛畝

俳句作法 (三)

河野喜雄

(文芸評論家)

三 初案・舌頭千囀・定稿

私は、諸名家の作句について述べた方がいいのではないか、と思うのであるが、編集者のご指示に従って、本号では、拙句について述べることにした。或いは、名家の句については、拙解の誤解もあるかも知れないが、自句については、誤解など、ありやうがないので、或いはその方が、作句法としては、却って打ってつけかも知れない。

以下、拙句の作句法について述べる。

前に書いておいたように、私は隔日出勤なので、火・木・土・日は在宅し、午前中読書、午後執筆ということにしているが、私の家は、武蔵野市の東南隅であって、井の頭公園までは一キロ程なので、在宅日には雨でない限り、昼食後、ステッキを振りながら散歩し、公園を一周して帰るのであるが、その途中、公園の橋の袂の小茶屋で、一杯、傾けながら、当日の俳句的発想を、そのヒントから、一時間ほどの間、ユックリ練るのである。

一月三日であるが、この日は略々日本晴れで、風もなくって暖たかく、小茶屋まで、日向の北岸を歩いて来な

がら、私はその櫟や、桜などの枯木の幹がその日本晴れの太陽光を反射して光り輝いている美しさにおどろいた。

そして、すぐ一句歩きながら纏めたのである。

冬暖の午下の枯木の鮮やけき

けれども、この句では、場所的限定が欠如していることは、私にはすぐ判ったので、やはり歩きながら、

神苑午^ご枯木鮮やか暖たけく

と一校したのであった。

そして小茶屋に入って、一杯傾けながら、歩いて来た方の枯木を眺めつつ、前句を再考したのであったが、そこで先ず気がついたことは、その「枯木」が、ただの「枯木」ではなく、「枯木群^{むぐみ}」であった事実であった。

上述したように、井ノ頭公園の東口の方から入って、池の北岸を歩いて行くと、左の池畔は桜であるし、右の方には櫟や榎が多い。だから、それはハッキリと「枯木

群」なのであって、「群」であるからこそ、その、日本晴の陽光を浴びつつ、光り輝いているのが、現に私自身の「詩的感動」のモメントだったのである。「枯木」は、当然、「枯木群^{むぐみ}」としなければならない。

小考の後、私は一応、定稿として、右の句を、左の様に改めた。

神苑午輝き光る枯木群

どうやら、一応出来上ったように思うが、如何であろうか。

「枯木群」が「光り輝やく」方の句は、右のように一応纏めたのであるが、上にもチョット触れておいたように、三日は、殆んど日本晴れであった。枯木が「光り輝く」ようならば、「日本晴」に近いことは、誰にも判ることであるが、私はそこで、この「日本晴」をテーマにしたところの、もう一句を作りたい、と思った。

私には、

朝戸出の東風うそ寒き日本晴

というような、「日本晴」の句もあるのであって、「日本晴」というのは、私は非常に好きなのである。

そして、前句を受けつつ、すぐに一句が出来た。

寒苑の樹枝輝やけき日本晴

しかし、そのすぐ後で、私は、「寒苑」をやはり「神苑」に、そして、「樹枝」は「枯木」にすれば、季語もチャントあるので、「寒苑」よりも、「神苑」の方が、より「具象性」が強いと思った。

神苑の枯木輝やく日本晴

私は、この句はこれで、一応出来ている、と思ったのであるが、そう思った次の瞬間、「ああ」と思ったのは、これが、前の、

神苑午輝き光る枯木群

と、全く同想ではないか、と直感したからである。「輝やき光る」と「日本晴」とは、表現上、聊さか異なっているけれども、枯木が「輝やき光る」のは、「日本晴」級の天気でなければ、あり得ないではないか。だから、右両句はシノニムなのであって、その一方は捨てられなければならない。

私は即座に、後句を捨てた。

けれども、私は、その「日本晴」のテーマに、「まだ何かある」とばかり、言わば「とりつかれた」のであった。

そして、やはりユックリと傾けながら、「神苑」をジックリと観照したのである。

そして、私が詩的「ヒント」を感じたのは、その神苑の「樹群」の彼方に透き見える大空、碧空が、如何にも遠く、遙らかな一事であった。

私は、即座にそれを句化した。

寒苑の日本晴れの空遠し

これは、読者もすぐお判りのことと思うが、私の感じ

たままを、直叙したのであって、一応の句にはなっていない、とは思うが、やはり、まだその格調・句格において、乏しい。

そして私はそれを、左の様に改めたのである。

寒苑の空遠らけく日本晴

前の「神苑」が、「寒苑」になったのは、「寒苑」としなければ、無季になるからである。

二月の十八日、前夜の雨が明けた日、よい天気だったので、やはり井ノ頭公園散歩に出かけた。園内に入ってから、

歩一歩歩み行く春神苑池

殊り鴨番ひて眠る神苑池

などの句が出来たが、この程度の句は、誰でも作れる句であろう。

やはり、小茶屋へ行って、独り傾けながら句案した。

そして、そこですぐに、

春暖の神苑池畔独り酌む

という一句が出来たのであるが、私は、この句を吟出し終えた瞬間、私の「死」のことを思った。

私は本年五月、七十五歳になるのであるが、両親共、九十歳まで生きていたので、私も、九十五歳位までは生きられる、と思っではいるのだが、やはり、「古稀」年齢を超える頃になると、人間はやはり、「死」のことを考えるらしい。

そして、「如何なる死に方をするか」ということが、その「死を考える」ことの、当然のテーマとならなければならぬ。

それでは、如何なる「死に方」をするか。

私は、早くからそれを、「笑って死にたい」と考えていた。

人間は、一生に一度しか生きられない。だからその一生は、出来るだけ楽しく生きて、死ぬ時には「笑って死ぬる」ような、そういう生き方をする——というのが、

私の、青年以来の哲学であった。

しかし、そのように、「笑って死ねる」ためには、「共同社会」における、私たち自身の、隣人たちに、憎まれたい、恨まれたりしてはならない。だから、最大限度に「隣人」たちと仲良くしつつ、けれども、自分自身は出来るだけ、自分自身を生き切る——ということが、本当に「笑って死ねる」生き方ではないか、と私は考え、七十年來略々、それを実践して来たと思う。

そして、その「笑って死なう」という、私の年來の信念が、この「春苑池畔独り酌む」という、前句の発想に結びついたのであった。

ああ、俺は、死ぬ時には、この神苑の、春の桜を眺めつつ、一杯酌みながら、静かに、笑って死にたいな。

と思ったので、すぐに、

わが願ひ春苑池畔酌みつ死なむ

という句が出来た。

けれども、これは字余りでもあり、少々、「頑な」で

もある。当然、改稿されなければならない。次の句が出来た。

春苑に酌みつゝ死なむわが願ひ

しかし、一杯傾けながら、これを見直していて、私はその「わが願ひ」という語が、俳句においては、全然、「冗語」であることに気づいた。

それは、希望の動詞にさえすれば、三字をも略するところが出来るではないか。

春苑の池畔酌みつゝ我死なむ

「神苑」と言いたかったのだが、それでは季語がなくなるので、「春苑」にした。

例えば、

神苑池春酒酌みつゝ我死なむ

でもいいだろうと思うが、俳句としては、やはり前句の方が、ムリがなくなつて、よいのではなからうか。

読者の批判を聴きたい。

(57・2・27稿)



念佛ひじり三国志

(五)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



「これから何処へ？」

住蓮は闇の路上に立ち止まると、語気をきつくして問いただした。生蓮房宗実がどこまでも追尾してくるからだ。そこは都大路と山腹を縫ってゆく間道とに岐れる辻であった。

「何処と申して……」

宗実も足を止め、返事をもつれさせた。彼自身どのようにな身を処置していいのか、わからぬのであろう。

「わしは東山吉水の禅室へゆきます。何としても法然お聖人さまにお会いしなければならぬのです」

「おお、法然お聖人さま」

宗実は感動で声をうちふるわせている。でも、あとの行動を明かそうとはしなかった。

安楽房邊西が捌らめ捕らえられたという。どんな経緯で、またどんなかたちで逮捕されたのか、皆目様子がわからない。それと、この逮捕が師の法然の身に危害をもたらさなかったであらうか。

べんべんと光堂で時間を空費するわけにはいかなかった

た。明早朝にでも、とひきとめる明遍僧都を振りきって飛び出してきたのだった。ところが生蓮房宗実も行動を共にした。

闇のなかで兩人は何となく対峙し合った。どちらも動こうとしない。

やがて、

「私も法然お聖人さまのもとへまいりましょう」

宗実は淡々と告げた。

「しかし……」

自分と法然お聖人との間には重大な相談事がある。場合によってお聖人は尋常な状態ではないかもしれない。局外者の貴僧とは無関係なことなのだ、と住蓮は突き放しかけて口をつぐんだ。

縁——そんな文字がいま住蓮の胸先で結ばれた。

この男とは、何か深い「縁」がありそうであった。今日の午後たまたま寂光院で初対面の言葉をかわしたわけだが、そのまま光堂まで同道してきて、しかもこの重大事突発の時機に同じ道筋を歩いている。運命的に深く結ばれているのではないだろうか。

住蓮は二、三步あと戻りすると、宗家とあらためて肩

を並べて歩きだした。暗黙のうちに東山への同行を容認したことになる。

都大路を避けて、暗い山間の道をえらんだ。万一、吉水の禅室が見張られていたとしてもこの間道からだと思入が可能であった。

肩を並べて歩きだしたが、住蓮は一語も発しなかった。なおこのひじりとの縁について考えている。

昼間、寂光院で宗実が洩らした言葉がよみがえった。

——私ども蓮花谷の住人は過去を語らず、未来を計らず……

そうだ。ひじりの原点を主張していたのだ。世を捨てたひじりとは、どのような生き方をすべきであるか。難局に直面したとき、どのように決断し、身を処すべきであるか。

つまり宗実の「縁」とは、いまの住蓮にとって人生の師表ともなるべき正道を教えてくれたことになる。

道の左右には蕎麦が群生していた。高い杉木立をかき分けて如月の冷徹な夜光が兩人の影をえぐりだした。

梟の啼き声がする。嫌な響きだ。

「尊長僧都という人は、よほどの権力者のですか」

宗実が、梟が啼きやむのを待って、ぼつりと訊いた。

「うむ……後鳥羽院の寵愛を一身に集めている人です」

「先ごろ、高野でもひと悶着がございました」

「……」

「高野領へ那智の行者どもが侵入してきましたのです。熊野の神領だと無体を申して。掛け合いのたびに那智ノ衆は尊長僧都の認可状をかざして横車を押してくるんだそうです」

「那智ノ衆と尊長僧都……なるほど、長巖検校のつながりですな」

「さあ、くわしいことは存じませぬ。その尊長僧都が先ほどは光堂へ明遍どのを訪ねてきたのですか」

生蓮房宗実は、ぼんやりと立っているようで周辺のささいな出来事や断片的な会話に注意深く神経を集中していたのである。

「法然お聖人の身辺に悪企くみを仕掛けてきたのです」

「法然お聖人に、ですか。なぜでしょう」

「お聖人の人氣が、下々の間で日ごと高まってくるのが困るのでしょう」

「法然お聖人は、未だお会いしたことはないが、私ら蓮

花ひじりの間でも日ごろ師と仰ぐ立派な捨てひじりでいらっしゃる」

「そのとおりです」

「そのお聖人に悪企くみを仕掛けるとは、尊長僧都も許したいお人なんですな」

「わしどももそうだと確信していますよ」

「その尊長僧都がわざわざ訪ねてくる。明遍どのも、したたかなお方でございますなあ」

「したたかなお方か……のう」

思わず住蓮は笑い声を洩らしていた。

したたかなお方、とはどういう意味なのか。明確ではなかったが、感じとして現状の明遍をびつたりと言いつていているようでおかしかったのである。

明遍は遁世のひじりなのか、在野の「少僧都」なのか。その立場はすこぶる曖昧である。

蓮花谷のひじりたちには、その財力を背景として頭目となって君臨する。しかも遁世ひじりをまっ向からふりかざして京の官界政界にゆさぶりをかける。当代一流の三論学匠とうたわれる虚名もまたこのゆさぶりに大きな効果をもたらした。

＜検非遺使の武者＞



立場が不都合になれば、いつでも遁世ひじりとなって逃げかくれ、時流が変転すれば再び「少僧都」の看板を持ち出してくる。少僧都の看板——かつて大僧都へ叙任される勅命を蹴った閥閥がこの僧位を実質以上に巨大なものとしていた。

曖昧な立場、ふたつの身分の巧みな使い分け。したたかなお方とは、まさにびったりの呼びかたではないか。

だが、いまの洩らし笑いは、じきに苦がい波紋をえがいて住蓮自身の鼻先でひろがった。

住蓮よ、お前とて、したたかな念仏ひじりではなかったか。

法然の声望を背景にして、専修念仏の理念を日ごと尖鋭化させていった。在家ひじりや信者を糾合統一することと挺身し、国政をも支配する大教団の設立を夢見た。鎌倉の武士たちを積極的に教化し、同志の列へ加えていった。思えばいま眼前に迫った難局にしても、この専修念仏教団が余りにも政治集団化した事実におびえた宮廷側の反撃だったと言えなくもない。

念仏ほんらいの、ひじりの原点に立てば、まさしく外道魔性の行動以外の何ものでもないはずであった。

「ところで生蓮房どの」

住蓮は、蕎麦の茎を踏んでゆく自分の足もとが歩一歩と謙虚になっているのを感じはじめた。

「はい、何でしょうか」

宗実の声は澄んでいる。

「高野の蓮花谷にいて、貴僧たちは日常何をしておいでか」

この宗実の生きざまが、しきりと気になるのだった。

「日常何を……何もしておりませぬ。さよう、蓮花谷の庵にいますときは仏壇を造っておりますな」

「仏壇？ それは何ですか」

「里の人々がわが家へかざる小さな仏堂ですな」

「家にそんなものをかざるのですか」

「かざらさせるのですよ。わしらが説いてまわって」

「里を歩くのですか」

「歩いて一戸づつ農夫や漁民をたずねまわります。死者が出たと聞けば、飛んでいって骨を拾ってやります」

「骨とは、何の骨ですか」

身分の高い人は別として、そんな名もない農民や漁師

州ニ偏歴ス

の家で「骨拾い」など、住蓮は聞いたこともなかった。彼の知識では、みんな捨ててしまっただけなのだった。

「人間の骨ですよ。火葬にした骨を、土葬のときは毛髪を剃って高野の霊地へ納めてやるのです。凡愚の人々にも仏の仲間入りをさせてやるのです」

「なるほど」

「口先でいくら阿弥陀如来の慈悲を説いても下々の者には通じません。行為がそれにとまなわなければならぬのです」

高野山、蓮花谷の念仏ひじりたちが足まめに全国各地を歩きまわり、人骨を収容し、かわりに仏壇を与える教化活動は、十二世紀半ばごろから着実に実施されていたようである。

「紀州風土記」の非事吏(ひじり)事歴はこう書いている。

——財宝ナケレバ善根ヲ施スニ便リヲ得ズ。諸国ノ路次ニ尸(シカバネ)ヲ晒ス無縁ノ靈骨ヲ拾ヒ、是ヲ高野ノ霊地ニ納メ菩提ノ資糧ニ擬ス。ソノ骨ヲ運ビケル料ニ負口(オヒ)ヲ造リテ諸

口先でいくら阿弥陀仏の大慈大悲を説いても庶民大衆には通じない。無知な人々はつねに行爲——物語を求めものだ。蓮花谷ひじりたちは、その供養布教を黙々と実践しているのだった。

しかも彼らはその報酬として何を得るのか。

「その日を食べるだけの糧をもらってきます。ひと握りの粟が、ひとかけらの餅がどれほど有難いか。明遍どのにはおわかりになりますまい」

またしても明遍僧都が引合いに出された。

思えば明遍の財力で養われていた蓮花谷ひじりたちは、その糧道が絶たれた途端、里へおりて精力的に供養布教を開始したにちがいない。それで糊口を満たす以上のものを、彼らは体得したのである。

宗教実践の本質が何であるかを知った。

「わしもその仲間へ加えてもらえるでしょうか」

住蓮は、まるで無知文盲な下民の姿勢で宗実の横顔をうかがった。

「仲間へ加えるも加えぬもないのですよ。蓮花谷は勝手

に来て、黙って住んで、念仏を唱えながら去ってゆく場所です。私が住みついたのも父の内大臣が信心した高野ですし、兄の少将維盛も近くの海に身を投じたと聞いたものですから、彼らの後生を弔うただけに……しかし、住蓮どの、蓮花谷では吉水の禪室のようなわけにはまいりませんぞ」

「吉水の禪室をご存知か」

「いや、人づてにしか聞いておりませんが、法然お聖人のような偉いお方もいませんし、弟子の席次もございません」

「うむ」

痛い指摘である。とりわけ最後の「門弟の席次」など、ひじり社会にはあるまじきことであらう。

この瞬間、住蓮は本気で蓮花谷へ通入することを考えたようである。一介のひじりとなって大衆信者のためにだけに生涯をささげたい。

住蓮と宗実が華頂山の尾根をつたって吉水の禪室へ降りてきた。

房が建つ台地は闇と沈黙（しじま）に閉ざされていた。みんなもう寝こんでしまったのであらう。彼らは南端に

ある下ノ房へはいった。

いつもだと広間にはみ出るほどのひじりたちが雑魚寝をしている。ところが今宵、やたらと空間が目立った。広間の三カ所ばかりに二、三人が散らばって臥しているだけなのだ。

不吉な予感がした。

住蓮は宗実に藁をつめた紙袋の布団をあたと、下ノ房をひとり脱けだした。上ノ房で寝ているはずの師法然の所在を確認しておきたかったのである。

上ノ房の外縁からあがりこんだ。

「勢観房、勢観房どのはいるか」

声を殺して呼びかけてみた。とっつき部屋で、いつもこの少年は臥しているはずだった。法然の身辺の世話をする勢観房源智である。

「どなたかな」

しわがれた声に戻った。少年ではない。

「住蓮です。あなたは……」

「おお、信空じゃ」

障子があいて法蓮房信空が立ち現れた。黒谷以来、法然に随侍してきた最上足の念仏ひじりである。

「お聖人さまは？」

「うむ。今日の正午（ひる）さがり、小松谷へ移って頂いた」

「やはり安楽房の一件のために」

「九条家から使者があつてな」

彈圧の手がここ吉水の禪室へ及ぶことを察知した九条兼実の配慮であらう。

小松谷御房——

平重盛の邸跡である。重盛生前には邸内の持仏堂に十
二光仏を安置、四十八箇の燈籠でかざったとつたえられ
ている。重盛のことを「燈籠大臣」と呼んだのもこれに
よる。

重盛の没後、邸内は荒れたが持仏堂だけは残った。重
盛の死に臨んで善知識をつとめた法然は、これまでにも
しばしばこの持仏堂に籠もったものである。

住蓮は、ふと下ノ房へ置き去ってきた生蓮房宗実のこ
とを思いうかべる。ここにも彼の「縁」が生じている。
宗実こそその平重盛の遺児ではないか。

「安楽房は太秦で捕らえられたと聞きましたが」

「そうらしいのう。何でも那智ノ検校の密告によるとい

うことだ」

尊長——長殿の線がくつきりと浮きあがってくる。

「こちらへは何か申してきましたか」

「いや、九条家からの使者があつただけでほかには何も
ない」

「月ノ輪殿下（兼実）が直接御下命になったのでしょ
うか。うかがうところでは殿下は病い篤いとか」

「うむ。誰ともお会いにならない。察するに長兼卿あ
たりの配慮であらう」

三条長兼は藏人長官の地位にあつて、宮廷内外の機密
を取りしきっていた。公平無私な人で、格別に専修念仏
者たちを被護したわけではないが不当な彈圧には、良く
これをかばった。あの興福寺奏狀の無法な訴えを処理し
た態度にそれがあらわれている。

いま信空が、三条長兼の配慮だろうと推測したこと
は、彈圧の魔手が急迫している事実をも裏付ける。

「安楽房の逮捕がどのようなかたちでお聖人の身にか
かわってくるのでしょうか」

「住蓮、これはただの安楽房個人の問題だけでは済まぬ
ぞ」

「とおっしゃると？」

「相手はどんなことでも捏造する。安楽房が自白したと申してな」

「捏造……専長僧都ら西面ノ武人どもならやり兼ねませぬ。捏造でも拷問でも」

「そして、すべての責任をお聖人さまにかぶせてくる。

国政転覆の陰謀を企らんなどとな」

「なるほど、安楽房の女犯だけではお聖人を罪することも出来ずまい」

「女犯か」

信空は、安楽房にどのような女犯があったか、くわしくは知らないようだった。いや、住蓮とてもまさか安楽房がああ坊門局と密通したとは信じがたいのであった。

いつだったか、安楽房とかわした密約——女犯を方便に用いる手段。住蓮は未だそれにすがりつきたい思いであつた。

「とにかく住蓮。このままだとお聖人の身は危い」

「わたしもそう見通しています。それにしても信空さま。さつき下ノ房へ立ち寄ってみました、人数がさっぱり減っておりますな」

「人数が減ったか……そうじゃろう。所詮は甘い蜜にたかってくる蟻どもよ。その蜜が失われそうだとすれば、誰も寄りつかなくなるわ」

「専修教団を号しても、頼りないものですなあ」
時の流れや利慾に集ってくる人々の軽々しさ、冷酷さ、というものであろう。

三

東山の夜明けは、背後に山をせおっているだけにおそい。そのおそい日輪が、もう下ノ房外縁いっぱい日差しを投げこんでいた。

住蓮は、そんな刻限になってようやく目がさめた。夕方まで信空と話こんで下ノ房へ帰って身を横たえたら、連日の疲れもあって泥のように眠りこんだのである。

目をあけると、すぐ頭上に生蓮房宗実の顔があつた。微笑をふくんだ柔和な表情だ。

育ちがいい、と住蓮はまじまじとその顔を眺め続けた。

「ご気分は如何ですか」

「いやあ、これほど深く安らかな眠りは久しぶりであつ

た」

「そうですか。私が拝見した限りでは、如何にも苦しげでございました」

「それほど苦しげでしたか」

「ここに汗をかいて」

いまま宗実はやさしい手つきで住蓮の額をぬぐってくれた。

「人間の苦しみとは、そんなものですかねえ」

「心は寝しずまっても肉体にじみ出てくる苦惱——やはり心もやすんではないのでしょうな」

「さよう、やすんでなぞおれる場合ではないのです」

住蓮はあわてて起き上がった。小松谷御房へゆかねばならない。とにかく一刻も早く法然お聖人と会って。

宗実は相変らず笑顔を引っこめなかった。

「先ほど皆さんは朝粥を食べてこられたようですよ。何でも今朝の粥には餅がはいっているそうで。私たちも馳走になるうではありませぬか」

「餅か。なるほど、それはうまいでしょうな」

唾液が口中にあふれてくる。そう言えば昨日、夕食をとりそこなっている。

心はせきたてられながら、肉体の欲求はやはり満たしておかないと何もできない。悶えと焦慮で責めさいなまれて、そのくせ正体もなく寝こんでしまった自分を思い出せばいい。

上ノ房へ連れ立っていった。

もはや粥は終ってしまったという。だが、餅だけはたつぷりあるようだ。

「この栗餅はどこから届いたのだ」

住蓮は黄色い切り餅をとりあげて小坊主に訊いた。

「はい、昨夕獅子カ谷の百姓三名が届けまいりました」

「獅子カ谷の百姓が？」

精舎へ集ってくる六時礼讀の講中であらうか。

「何でも二人のやんごとなき女人が村へ現れて多額の銭を与え、栗一俵を餅について吉水の禅室へ届けよと申しつけたそうでございます」

「やんごとなき女人がお二人か」

時が時だっただけに住蓮はあれこれと思いをめぐらした。あるいは鈴虫、松虫という二人の姫たちであろうか。でも何のためにこの差し入れであるか。

小坊主は栗餅を焼きはじめた。香ばしいその匂いが、

たちまち住蓮の全身を餓鬼に変じた。情けないほど、一刻も早く餅に武者ぶりつきたくなった。

「これから東山の小松谷御房へゆこうと思います」

住蓮がこれからの行動予定を宗実に示したのは、焼きあがった栗餅を四つばかりたて続けに食したあとだった。腹が満ちて、ようやく理性を取り戻したようである。

「小松谷とおっしゃると、よもや燈籠堂があつたあの屋敷——」

「その燈籠堂ですよ。法然お聖人はいまそちらにいらっしゃる。貴僧の父者人のお屋敷です」

「未だ残っていたのですか。とくに減んだと思つていましたのに」

宗実はなつかしげに眼をみはった。

「小松内府どのがみまかつたあと、法然お聖人が護持をゆだねられました。屋敷の他の建物にまで手は及びませんでした。十二光仏の持仏堂だけはだいにじにお護りしてきました。お聖人は時折そちらへお泊りにゆかれま

す」

「そうですか。私も幼い日何度が遊びに出かけたことが

あります。今度も暇が許せば立ちまわって廃墟でもいい、見ておきたいと考えていました」

「それは丁度良かった」

「住蓮どの」

宗実は口調をあらためた。

「何ですか」

「久々で花洛へ出てみましたが、すべてが破壊されつくされたようで案外何もかも残っているものですね」

「……」

「世を捨て切つたつもりでも心の一隅には、すべてが残っているわけです」

住蓮は、いよいよこの高野ひじりとの「縁」の深さを痛感しないではおれない。

吉水を出た。道を北へたどった。松林の小径をぬけてゆきながら、住蓮は思いつめたように言った。

「生蓮房どの。貴僧にひと肌ぬいで頂かねばならぬ事態になったようです」

「通世の私に何が出来ましようか」

「いやいや貴僧でなければのことです。それはこれからお聖人にお会いした結果ですが、貴僧の兄者にあたるお

方に会わせて頂きたい」

「私の兄者——」

「大相国頼実公ですよ」

「……」

宗実は口をつぐんだ。

兄とは言っても、もちろん血縁はない。平重盛を父に持った宗実は、生まれ落ちてすぐに左大臣経宗の猶子となった。その経宗の実子がいま京師における兵杖の権を握る（名目上だけだが）大相国頼実であった。

もちろん宗実は、あの寿永二年の平家没落時に養父経宗から追われている。恨みこそあれ、頼実に親愛感など微塵もないはずだった。

それを昔の薄い縁だけにすがって大相国頼実と再会せよ、と住蓮は言う。

「何のために大相国と——」

宗実はきびしい眼で住蓮を見返した。

「人ひとりの命を救うためです」

「その人とは？」

「法然お聖人です」

「お聖人の命が……」

「危いのです」

「なぜそんなことが」

「じきにわかります。じきに」

住蓮はそれ以上、話を進展させなかった。おそらく彼の胸中でえがいた構想も、法然の会ってからでないと確固たる骨格を組み上げることが出来ないであろう。

（つづく）

◎ハガキ印刷や案内状等、小物印刷にご利用下さい。
ご寺院関係の皆様は、とくにご紹介します。

◆阿島印刷有限公司◆

〒164 中野区弥生町五―八―十六
TEL (03) 382-1022

『浄土』誌の購読希望者のご紹介を、広くお願い申し上げます。昭和五十六年度より、年会費誌代を三〇〇〇円に値上げいたしました。お見限りになることなく、どうぞ末永く宜しくお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願ひ——

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただけてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい)

一、枚数 四百字用紙五枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 四月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十七年三月二十五日 印刷
昭和五十七年四月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒(二三) 振替東京八一八二一八七番



法然上人ご誕生850年を慶讃して 「わたしらの勢至丸さま」をおまつり下さい。



伊勢教区の可愛いおてつぎ子供奉仕団の心のこもった蘸金によって、勢至丸さまのご銅像が和順会館前に建立されました。各ご寺院の前庭に、幼稚園に、保育園に、ご誕生850年を慶讃して、ぜひ端然と合掌される《わたしらの勢至丸さま》をおまつり下さい。

ブロンズ製

比叡山延暦寺大仏師 松久朋琳先生彫像

大型 高さ 68cm 巾 90cm 奥行 48cm

小型 高さ 33cm 巾 45cm 奥行 24cm

大型像謹納先御芳名

京 都 総本山 知恩院様	東 京 大本山 増上寺様	大 阪 守 口 来称寺様
京 都 佛教大学幼稚園様	岩 手 花 巻 広隆寺様	兵 庫 尼 崎 甘露寺様
京 都 東山学園幼稚園様	三 重 鈴 鹿 悟真寺様	鳥 取 鹿 野 幸盛寺様
京 都 文教短大幼稚園様	尾 張 一 宮 劔正寺様	山 口 仙 崎 円究寺様
浄土宗 吉水会御寄進	鳥 取 賀 露 東善寺様	愛 知 豊 川 上善寺様
沖繩袋中国様	鳥 取 布 勢 極楽寺様	滋 賀 草 津 教善寺様
滋 賀 野 洲 福泉寺様	滋 賀 信 楽 法藏寺様	岐 阜 八 幡 洞泉寺様

大 西 法 衣 佛 具 店
株式 会社

〒605 京都市東大路通知恩院バス停前
電 話 (075) 541-3377(代)

郵便振替/京都-2294

取引銀行/第一勧業銀行 四条支店
富士銀行 河原町支店